

共同討議

『現代思想 2008 年 9 月号』

特集：大学の困難』

目次（特集部分のみ）

【インタビュー】

人文系大学と人文学の将来について

／ 亀山郁夫

国立大学法人化のジレンマ / 野家啓一

【討議】

大学の困難 / 岩崎稔＋岡山茂＋白石嘉治

【転換】

大学という名の廃墟をあとにして 東京都立大学問題から見る〈文化〉と〈抵抗〉

／ 初見基

【理念】

大学の名において私たちは何を信じることを許されているのか

ジャック・デリダの大学論における信と場の問いから / 西山雄二

大学改革の日仏比較と学長たちの惑星的思考 / 岡山茂

【困難】

国立大学の「選択と集中」 運営費交付金削減の現在 / 小沢弘明

日本の研究教育力未来のために 競争的施策の課題 / 竹内淳

【院生】

高学歴ワーキングプアが照らす大学の闇 / 水月昭道

院生サンディカリズムのために / 白石嘉治

群れを呼ぶ大学院生たち 反洞爺湖サミット運動とキャンプ大学 / 仲田教人

【可能性】

大学は死んだ。地下大学が始まる。 / 平井玄

今夜、講義がある 連続講義「大学の夜」という実験 / 永田淳



コメントのためのメモ（大河内泰樹）

1. 概観：この10年の経験と変化

9年前の特集（『現代思想 特集：大学改革』九九年六月号）と比較して

二つの「大学」：

- ・ いわゆる「大学」（の現状）

亀山・野家インタビュー、討議（岩崎／岡山／白石）、岡山（日仏）、小沢（交付金削減スキーム）、竹内（研究費配分の問題点）、水月（高学歴ワーキングプア）、初見（都立大の経験から）

- ・ 「隠喩としての」、あるいは「本来の」大学

仲田：反サミット運動における院生と大学／平井：「大学は死んだ」→地下大学／永田：生協書店における「連続講義」／西山：Ciph, スユ+ノモ、utcp

背景としての新自由主義政策（いわゆる「グローバリゼーション」）

→モデルとしてのアメリカよりもひどい現状（竹内論文） cf. ドイツ

→戦線の後退か？積極的な希望か？

- ・ 《院生》 仲田／白石：院生のサンディカリズム／水月：院生の活用

- ・ 図書館・アーカイヴとそれへのアクセスが必要

記憶の装置として→Humanities

2. 制度としての「哲学」「人文科学」

近代の大学とnation-state体制

有用性と＜自立・自律＞の問題

しかしまた「大学」を人文科学によってのみ語らないこと

3. 希望？

既得権益の固守としてではなく、「大学」を擁護するために
余暇のない社会で（教員も院生も、金持ちも貧乏人も）

少なくとも今いるこの場所について問うこと

公開討議「大学の名において私たちは何を信じることを許されているのか」
——『現代思想』2008 年 9 月号「特集：大学の困難」を読む

1 大学のジレンマ——亀山・野家インタビューから

- ・経済的基盤——グローバル化時代における二極化(市場原理、法人化、競争型資金)と、十八歳人口の減少・少子化の波 → 大学の企業化
- ・理念的根拠——基礎研究、人文的教養、スローサイエンス、アジール(聖域＝保護領域)
→ 市場原理による侵食

2「理念なき大学」以後の大学への信——デリダ『条件なき大学』と西山論文をめぐって

3 終わりに 大学のユートピア／ディストピア

——「大学という場を通じて何を信じることができるのか」

【引用 1】

エクセレンスに訴えることは、大学の理念がもはや存在しない、あるいはむしろ、大学の理念がいまやすべての内容を失ってしまっているという事実を示している。システムに完全に内在する、非指示的な価値単位として、エクセレンスは、テクノロジーが自身を省みる契機以上のものを示さない。システムが要求するのは、ただ、活動が起こることであり、エクセレンスという空虚な概念は、情報にかんする最適入出力比率を指し示すにすぎないのである。

ビル・レディングズ『廃墟のなかの大学』54 頁、訳文変更

【引用 2】

[……]しかし重要なことは、大学か在野か、大学か社会か、といった二分法を立てることでも、また逆に、大学の公共空間は社会-経済の論理に覆い尽くされてしまったと諦観することでもない。むしろ、従来の大学制度に接木された場において研究教育を反省的に展開させることで、大学と社会-経済の双方を肯定的に変化させていくことが重要ではないだろうか。社会-経済の論理によって大学の固有性が著しく失われてしまったとされるならば、逆に、大学制度の余白に永続的な固有性を前提としない場を存続させ、学問の探究に即して大学と社会-経済との関係を変容させることはできるだろう。

西山雄二「大学の名において私たちは何を信じることを許されているのか」『現代思想』2008 年 9 月号、122 頁

【引用 3】

私たちは〈人文学〉の内部で〔大学〕の単純化しえない外部と未来のことを考えます。〈人文学〉の内部のなかに閉じこもっていることはできないし、そうするべきではないと、私たちは〈人文学〉の内部で考えます。しかし、こうした考えは強力で首尾一貫したものとなるために〈人文学〉を必要とします。[……]条件なき大学は、今日、大学と呼ばれているものの囲いのなかに必ず位置づけられるわけでも、もっぱらそこに位置づけられるわけでもありません。それは教授という形象のうちに必然的に、独占的に、範例的に表象されるわけでもありません。条件なき大学は、当の無条件性が告げられうるいたるところで生じ＝場をもち、自らの場を求めるのです。この無条件性が、おそらく、（自らを）思考をうながすところならどこにでも。ときには、おそらく、「条件」という論理や語彙を超えたところにさえ。

ジャック・デリダ『条件なき大学』71-72 頁

【引用 4】

例によって、大学は、活用＝搾取しうる知識の再生産によって既存の秩序を確証する。しかしながら同時に、それはまた、知りうるものの可能な限界としての〈未知のもの〉に開かれようと懸命になるにちがいない。今日しばしば、おそらくあまりにも頻繁に「最尖端(カッティング・エッジ)」が語られる。しかしながら、切る(カットする)こと、そのエッジ(尖端)は、ひとつならずの方向に、未知のものだけでなく、既知のものにもまた切り込むにちがいないことを忘れてはならない。ここには——もしあるとすれば——「グローバル化」の要請をまったく斥けることもできなければ、その我有化のロジックを完全に受け入れてしまうこともできない大学のための可能な未来がある。そうした大学は、たとえいくつかの傷跡を負うことになるうとも、未来のカッティング・エッジに開かれ続けなければならないのである。

サミュエル・ウェーバー「大学の未来——カッティング・エッジ」(Samuel Weber, *Institution and Interpretation*, expanded ed., p. 235)

【引用5】

大学の廃墟に住まうこととは、その空間がもつ現在の複雑さに真剣に注意を注ぐことを意味している。そしてそれは、もはやわれわれが住まなくなった歴史の時間性をめぐって、この歴史がわれわれに遺贈した空間を方向転換するという、終わりなき仕事を企てることなのだ。イタリアのさる都市の住民のように、われわれはルネサンスの都市国家を再建することも、また、その遺跡を破壊して、その代わりに合理的に計画された高層ビルを打ち建てることもできない。われわれができるのは、ただ、そのごつごつして不格好なものや曲がりくねった道を新たな用途に変えることである。そのためには、閉鎖された広場や意味のない鐘楼が引き起こす認識的な不協和音から学んだり、それを楽しむことである。

ビル・レディンズ『廃墟のなかの大学』177 頁、訳文変更

「大学の名において私たちは何を信じることを許されているのか」

斉藤 渉

【実利 vs. 教養】

国立大学法人化に反対する主張の中にもしばしばあったのですが、ネオリベリズムに対抗するものとして、総体としては保守的な反応かもしれませんが、古き教養主義の普遍的価値を対置する動きがありました。それは議論として単純なものでした。「**実利や市場に解消できないものがあるのだ**。それは人間らしい**教養**だ」と言われるときに、一定程度の反響は得られるのです。でもそれはたいてい「そんなこと言ってもお金がないんですよ」と返されたり、あるいは「全然実用的でない」と言われたときに、単純に黙って引き下がってしまいました。でも、古き人文学が人文学として考えられることのすべてではない。ネオリベリズムが新時代の唯一の可能性では断じてないのと同様にね。[...] 可能性としての大学、あるいは可能性としての人文学というものをきちんと鍛え直す作業がまずは必要です。

(討議「大学の困難」より、岩崎稔氏の発言：p.90)

- ・「教養」＝実利や市場に解消できないもの

→ 「○○でないもの」という規定： 自らの存在意義を積極的には述べるできないジレンマ

- ・「可能性としての大学、あるいは可能性としての人文学」—— 私たちは何を信じるものが許されているのか

【ケーススタディ：COEに踊らされる研究・教育現場】

COE そのものは、すごく無駄なことをしてしまうシステムになっている。一度 COE を取ると、数年間にわたって億を超える単位で研究費が来るのですが、そのためには非常に不自然なことをしなければなりません。大学を競わせるという姿勢がトップ 30 [=COE の元となる構想] 以来ありますから、各大学はうちの大学の教員はこんなにすごいんだ、こんなことができるんだということを粉飾しなくてはならない。[...] たいていは資金が取れてから、それを実際にどう消化するのかに苦しめられるというばかばかしい状況になる。そこでは、資金を使うためにみんなが苦しまなければいけない。(同上：p.100f.)

「うちの大学はこんなにも素晴らしい」という粉飾決算をやらなければいけないシステムになってしまう。だから嘘ばかりです。COE をやっている当事者たちも、これが嘘だということはわかっている。嘘だとわかっていないで踊っている人は、よほどお目出度いし、そういう手合いもなかにはいるのでしょうが、大体の人間は馬鹿げているけれども踊らなければいけない状況に置かれている。踊らなければ次に金が来ないわけですからね。そういうことが進行していて、知的な作業とはおよそかけ離れたことになっています。(同上：p.102)

- ・「ばかばかしい状況」

→ なぜ不合理がまかりとおるのか

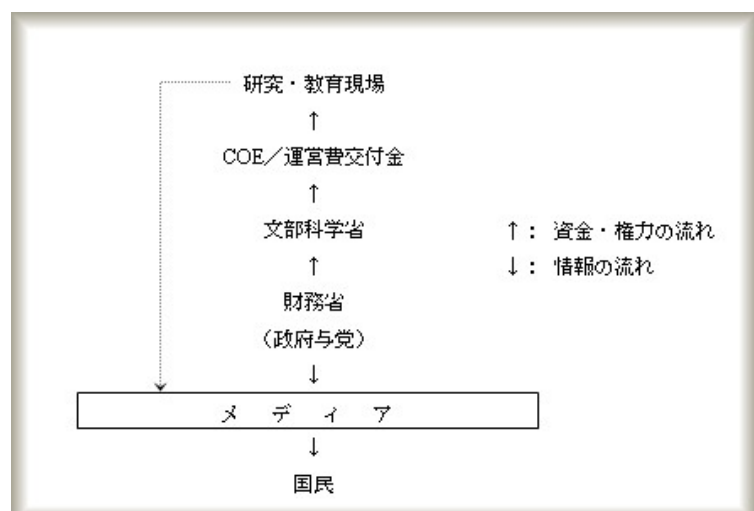
- ・国民と研究・教育現場の乖離

→ 伝わるべき情報を伝える経路がない
あったとしても関心・注意を引かない
(例： 国立大学法人化法案)

- ・大学に、人文学に可能性はあるのか

→ あるとした場合

→ ないとした場合



大学の門前—『現代思想』の特集「大学の困難」を読む(藤田尚志)

両面作戦の必要性:「今ここ」の重要性を言うと同時に、「反時代的」であらねばならない。

問題設定:大学の貧困、貧困の大学

《ドイツ語だと「困難」を指す言葉は die Not なんです。「困難」とともに「貧困」や「必要」という意味があります。院生にとっても、また各私立大学・国立大学のそれぞれの現場にとっても本当に実際のお金の問題です。》(岩崎稔、「討議・大学の困難」、85 頁)

問題設定の深化:大学内の至る所を走る「効用」の断裂(弱い者がさらに弱いものを叩く)

《心理学や社会学にはなんの痛痒もないと考えられ、分断策は功を奏した。》(初見基、135 頁)

大学の「外部」(1)地下大学:「大学を揺さぶる地下の坑道になれば」(平井玄、218 頁)

大学の「外部」(2)フランスの例:大学・グランゼコール・CNRS(岡山茂、144 頁)

問題の核心:「貧困の大学」は「大学の貧困」を批判できない

《大学はスロー・サイエンスが生きる場所です。市場原理に従えば、ファスト・サイエンスだけで済むことです。スロー・サイエンスは短期的利潤は生まない基礎学ですが、「スロー」という理念が生き方自体に関わるものとして大学にあるかどうかが最終的に重要だと思います。スロー・サイエンスが生き残れなければ、大学という名前を冠している資格はないでしょう。学生にとっても、二十歳前後に市場原理とは一線を画して、好奇心を追求できる時間と空間に身を置くことは、彼／彼女らの将来にとって非常に大切なことです。一種の「アジール(聖域)」と言うべきでしょうか。

ただ、そのアジールを維持するには、やはり財源が必要なのです。金がなければ残念ながら理念は維持できません。しかし財源の話になると市場原理を無視はできませんので、そこが非常に大きなジレンマですね。》(野家啓一、77 頁)

問題の裏面:数字を恐れるなかれ(大学は常に既に条件付きの大学である)

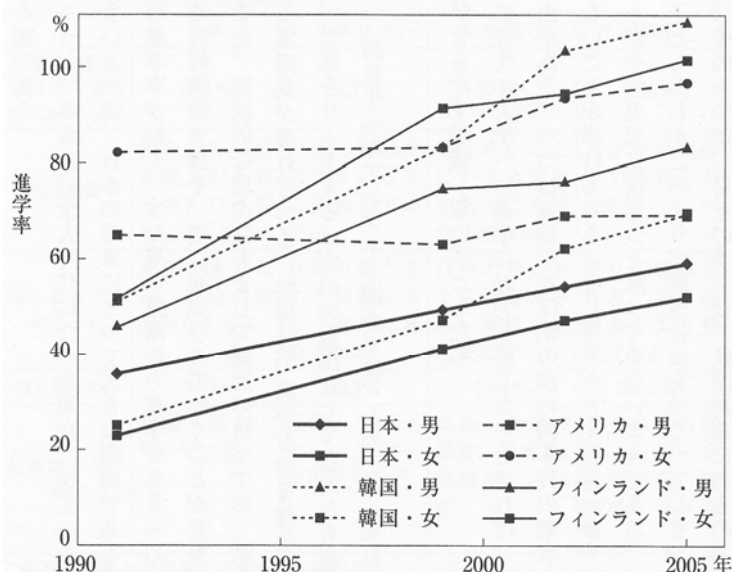
《米国においては女性やマイノリティの研究を支援する多くの研究資金があるが、日本においても女性や私大研究者への支援を充実させる必要がある。かつてない急激な少子化を迎える我が国において、研究費の配分は、単に研究だけでなく、人材育成と密接に関わっており、定量的議論に基づいた合理的な施策が展開されることを期待したい。》(竹内淳、174 頁)

解決の模索:Measure for Measure(「財」の脱構築と大学の未来)

それゆえ大学の知—政治(noo-politique)は、今日の新自由主義的な施策の限界を形作る。新自由主義が照準を合わせるのは、医療と教育の領域である。それらの営利事業化によって資本の蓄積を目指す、大学が両者の根幹に関わっていることに注意しよう。大学は医師を養成し、教員と教材を通じて教育課程の全般に関わる。しかしながら、大学が「共同財」に根差す限りにおいて、交換という経済の原則そのものに馴染まない。「政治経済学」の「財」は希少性によって規定されているが、「共同財」はたとえ万人に無償で提供されても消尽することはない。(白石嘉治、192 頁)

資料集 (作成：西山雄二)

図1 各国の高等教育進学率



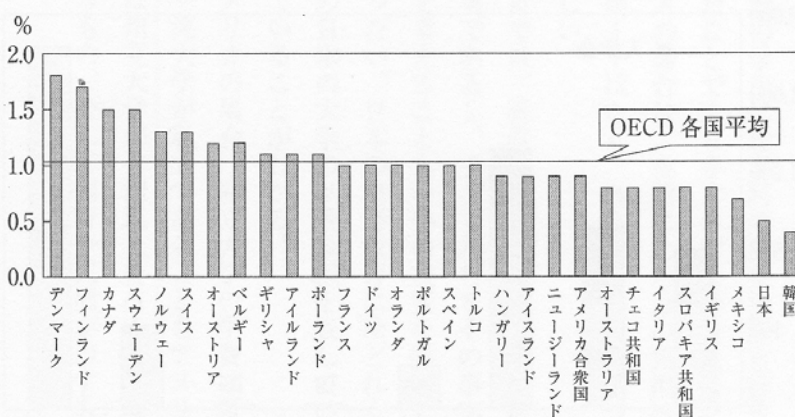
注 データは、1991 年、1999 年、2002 年、2005 年のみ。各国の同年齢総人口に対する進学率の男女平均はそれぞれ、日本 55%、韓国 90%、アメリカ 82%、フィンランド 92%。その他、進学率の高い国として、ニュージーランド 82%、デンマーク 81%、ノルウェー 78%、オーストラリア 73%、スペイン 65%、イギリス 59%、フランス 56% などがある (いずれも 2005 年)。

出典 UNESCO Institute for statistics, Data centre より作成。

日本ではみんなが大学に進学する？
日本の大学・短大への進学率 (55%)
は OECD 加盟国のなかで低い。

図3 高等教育に対する公財政支出の対 GDP 比

国際比較

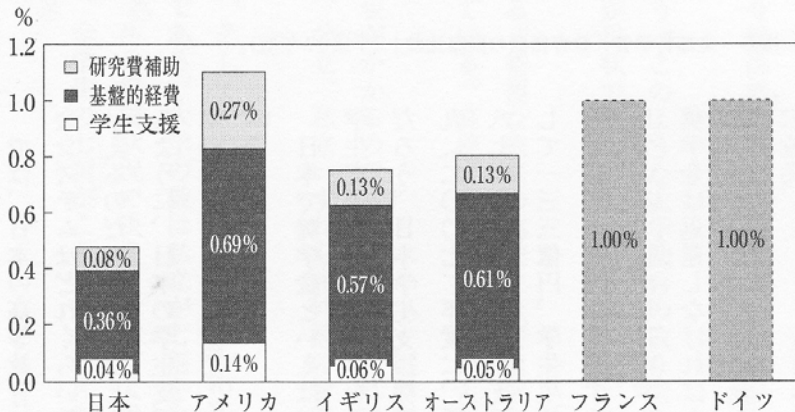


出典 OECD「図表でみる教育」2004 年版。

日本は大学にお金を投資していない。
(総額 2.6 兆円、GDP 比 0.5%、
世界 28 位の値)

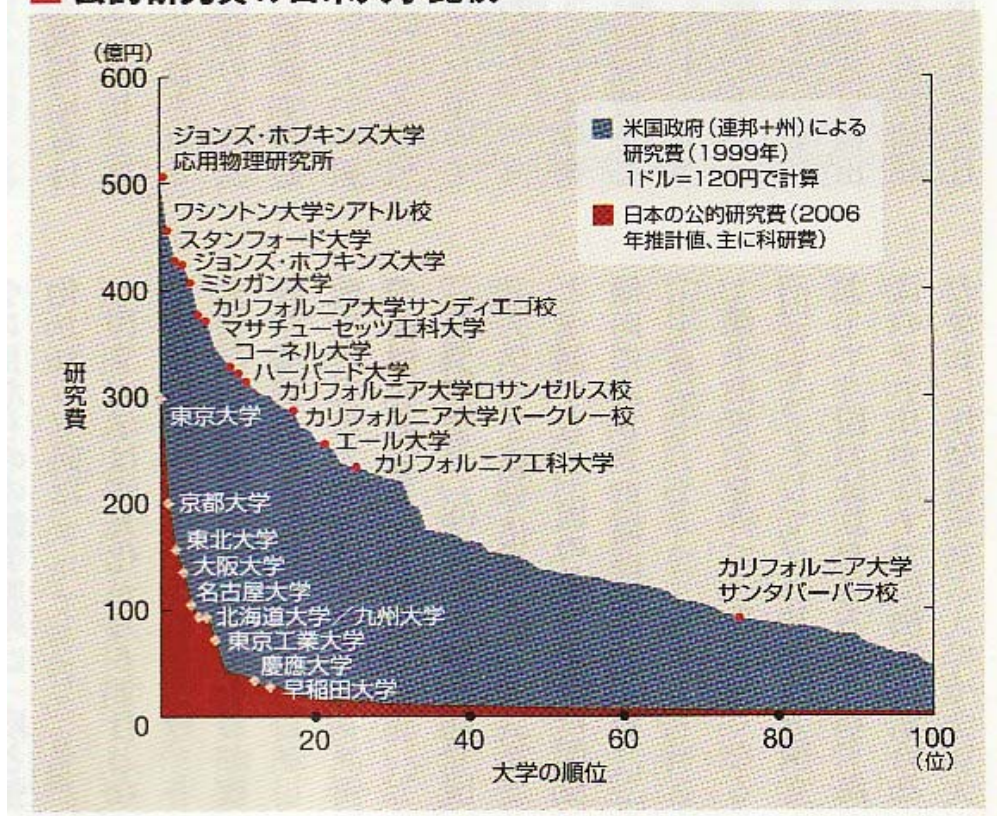
日本の高等教育は私費負担の割合が
高い。(私立大学が約 75%)

主要国との内訳の比較



出典 OECD「図表でみる教育」2002 年版に合わせて、公表データより文部科学省作成。

■ 公的研究費の日米大学比較



■ 「不要」などと判定された事業

()内は08年度の予算額。単位億円

不要

- 豊かな体験活動推進 (10)
- 道徳教育実践研究 (3)
- 総合型地域スポーツクラブ育成推進 (7)

- 子どもの体力向上地域連携強化 (1)
- 子どもの健康を育む総合食育推進 (2)
- 家庭の教育力向上に向けた総合的施策の推進 (15)
- 教員研修センター (14)
- 科学技術関係人材のキャリアパス多様化促進 (4)
- 大学教育の国際化加速プログラム (20)
- 質の高い大学教育推進プログラム (86)

今のままなら不要

- 「心のノート」の作成・配布 (4)
- 全国体力調査 (3)
- 奨学金貸与事業 (1018)
- コミュニティー・スクール推進プラン (2)

- 全国学力調査 (62)
- グローバルCOEプログラム (340)

民間に移管すべきだ

- 日本科学未来館 (28)
- 大学入試センター (4)

凍結すべきだ

- GXロケットプロジェクト (56)

日本の公的研究費の約 50%が上位 10 校に配分され、ごく一部の研究大学だけが競争力をもつ。

アメリカの公的研究費は上位 10 校で 20%、その他の大学にも比較的緩やかに配分されることで、層の厚い研究大学群を形成している。

「グローバル COE プログラム」、今のままなら不要

2008 年 8 月 4-5 日、自民党「無駄遣い撲滅プロジェクトチーム (PT)」は、文科省にヒアリングを実施し、政策の必要性について判定する「政策棚卸し」をした。結果的に約 160 億円相当の 10 事業が「不要」、約 1430 億円相当の 6 事業が「今のままなら不要」と判定された。

〈参考文献〉

- ・『科学』(2007 年 5 月号) 岩波書店
- ・学術研究フォーラム『大学はなぜ必要か』NTT 出版、2008 年。
- ・『週刊 東洋経済』(2007 年 10 月 13 日)
- ・竹内淳「日本の研究教育力の未来のために」『現代思想 2008 年 9 月号』。